

## はじめに

二〇一一年に『孤立の社会学』を執筆してから、七、八年の歳月が過ぎた。前著の出版当時は、二〇一〇年にNHKスペシャルで『無縁社会』の特集が生まれ、二〇一一年に東日本大震災が起き、無縁ブーム、絆ブームが起きていた。

ブームはいつか沈静化するとおもっていたのだが、なかなかそういった兆しは見えない。それどころか、いつの間にか「ぼっち」（ひとりぼっちを表す俗語）や「よつとも」（挨拶するだけの友だちを表す俗語）といった言葉も生まれ、人との距離や孤独・孤立に対する感度は相変わらず高いようだ。前著を出した当時よりも、明らかに取材件数が増えていることから、孤独・孤立への世の中の関心の高さがうかがえる。

しかしながら、まわりを見渡してみると、孤立している人がそう多いとは思えない。たいていの

人はどこかの集団に入っているし、ケータイやスマホで頻繁に連絡を取っている人も多い。どうも、一見つながりに取り込まれているように見えて、その内側に孤独感を抱えている人が増えているようだ。

一九六〇年代、七〇年代に人びとの耳目を集めた「日本人論」では、日本人は「甘え」を軸に、内集団びいきをしている、という言説が展開されていた。この考えは多くの人に支持され、日本人イコール集団主義というイメージが定着していった。

しかしながら、人びとに、時には「煩わしさ」すら感じさせる集団の拘束力の強さは、徐々に過去のものとなりつつあるようだ。人びとは、身内への「迷惑」を気に向け、甘えることをためらうようになっていく。

内集団の外にある「世間」に迷惑をかけた人を執拗にたたき姿勢は今も変わらない。インターネットが普及した現在、人への迷惑を捕捉する網の目は、より精細になっている。人びとに孤独感が蔓延する背景には、上述のような社会構造の変化があるに違いない。

本書は、多くの人がつながりに対して漠然とした不安を抱く社会を「孤立不安社会」と名付け、現代社会の孤立にまつわるさまざまな現象を検討した。内容は、人から受け容れてもらえない不安、つながりの格差、孤立死、地縁の再編と多岐にわたっている。とはいえ、各章が連関する構成をと

っているので、なるべくなら序章から順に読み進めていただきたい。

なお、本書の第一章、第二章、第三章、第五章、第六章は、既発表論文をもとにしている。初出一覧は巻末に掲載した。収録された論文は、本書の流れに合わせて、それぞれに加筆修正を施している。